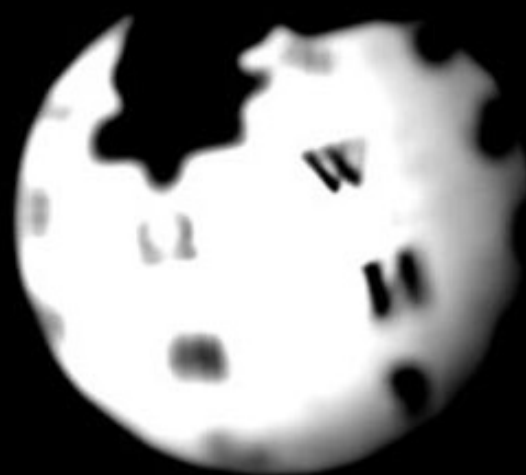


# ISSUES II



Word  $\doteq$  World

了

## Issue

〔議論の〕 論点、争点

〔問題の〕 核心、急所

〔困難や問題の〕 決着、結果

〔世間の〕 関心事、注目を集める事柄

〔定期刊行物の〕 号

〔出版物の〕 版、刷

〔傷口から出る〕 膿、血液

# 目次

---

## <ISSUES II>

- ・ 悪いのは誰か
- ・ この国の首相がすぐ交代するのは何故か
- ・ 先制攻撃は正しいか
- ・ みんなが幸福になるにはどうしたらよいか
- ・ 馬鹿は風邪ひかないのか
- ・ 死刑は廃止すべきか
- ・ 客観性は正しいか
- ・ 平和に犠牲は止むを得ないのか
- ・ 選択できることは自由か
- ・ 言葉とは何か

## <ISSUES>(既刊)

- ・ 神は存在するか
- ・ 私は何者か
- ・ 自由になるには
- ・ 自然とは何か
- ・ 懸念が的中するのは何故か
- ・ 席を譲れないのは何故か
- ・ テスト勉強が捗らないのは何故か
- ・ 一般的とは何か
- ・ 何故、戦争はなくなるのか
- ・ 寂しいのは何故か
- ・ 人殺しはいけないことか
- ・ 何故、人は泣くのか

## ～以下順次追加予定～

- ・ 世界の崩壊が始まったのはいつか
- ・ 言葉とは何か
- ・ 「ほどほど」とはどれほどか
- ・ 生きる意味は何か
- ・ 失くしたモノは何か
- ・ 愛とは何か
- ・ 善と偽善の違いは何か

- ・客観と主観の違いは何か
- ・人の不幸が楽しいのは何故か
- ・人間とは何か
- ・正義とは何か
- ・無知は悪か
- ・何故、人間は残酷になれるのか
- ・勝ることは良いことか
- ・人間は何故、反省しないのか
- ・自我とは何か
- ・社会性とは何か
- ・欲をコントロールし得るか
- ・立派とはどういう常態か
- ・人間は何故、差別するのか
- ・愛は絶対か
- ・死刑は廃止すべきか
- ・偶然と必然の違いは何か
- ・やられたらやり返すべきか
- ・人間は何故、同じ失敗を繰り返すのか
- ・生まれ変わりを信じるべきか
- ・結局のところ、幸せとは何か
- ・命の重さは違うのか
- ・犠牲は止むを得ないか
- ・想定外は無くせるか
- ・誤解が生じるのは何故か
- ・何故、思いは通じないのか
- ・戦争は何故起こるのか
- ・お金は万能か
- ・世界は平和か
- ・人間は何故、差別するのか
- ・孤独とはどういう状態か
- ・何故、配慮が足りないのか
- ・強いことと弱いことの違いは何か
- ・正常と異常の違いは何か
- ・人は何故、死ぬのか
- ・この世界で変わらないものは何か
- ・人間は滅ぶべきか
- ・人は何故、老いを受け入れられないのか

- ・新しいほうがよいか
- ・浅ましくて何が悪いのか

## 悪いのは誰か

---

「悪いのはいったい誰なのでしょう？」

「君だろうね」

「何故ですか？納得できません！私は何も悪いことやってないのに！」

「じゃあ誰が悪いんだろうね」

「・・・」

「君はきっと、いろんな悪者を考えているんだろう？例えば、こんな社会にした先人達が悪い。無能な政治家が悪い。世知辛い世の中にした資本主義崇拝者達が悪い。こんな教育を私にしてきた大人たちが悪い。こんな育て方をした親が悪い。利益と効率化しか考えない組織が悪い。多数決でしか物事を決めれない集団が悪い。私をこんな眼にあわせたあいつが悪い。とか」

「だって私は悪くないんだもん！」

「人は何かにつけて悪者探しをしてしまう。でも、そもそも悪者なんていたのかな？」

「えっ？」

「だから、悪いか悪くないかだけで判断してしまった君が、どうしても悪く見えてしまうんだよ」

「じゃあ、誰も悪くない？」

「それはわからない。視点でいくらでも変わる。人は自分の正当性を立証するために悪者探しをしてしまう。そんな簡単な事例なんてなかなかないものなんだよ」

## この国の首相がすぐ交代するのは何故か

---

「どうしてこの国の首相はすぐに辞めちゃうんでしょう？」

「根本的に勘違いしているんじゃないかな」

「どういうことですか？」

「辞めることが責任をとる、ということだと勘違いしている節があるね」

「でも、何か失敗があるからこそ責任を取らざるを得ない状況になるわけですよ」

「君は失敗しない人間なのかい？人間なんだから失敗はだれでもするよ。致命的な失敗さえしなければ問題ないと思うんだけどね。細かい失敗を野党に攻められて、やっと辞める言い訳ができたと言わんばかりに辞めていく。後に託して散るのが美しいと思っている感さえある。この状況がいけないね」

「では、どうすればこの状況を改善できるのでしょうか？」

「辞めないことだよ」

「え？いや、そりゃそうですけど・・・」

「細かい失敗をしよう、失言しよう、支持率が急落しよう、まずは続けること。責任を取れと言われても、任期いっぱい辞めずに自分の力で改善することで責任を取ることだね。短期間で結果なんて出るわけ無いじゃないか」

「図太くないとだめですね」

「そう。この国の首相は図太くないとだめだね。過去の歴史を見てごらん。長く努めた首相は図太い人ばかりでしょ」

「ああ、確かに」

## 先制攻撃は正しいか

---

「やられる前にやっておくことは正しいことだと思いますか？」

「君はそういうタイプ？」

「状況によります」

「状況によって正しい場合と正しくない場合があると思っっているんだね？それをどうやって判断しているの？」

「自分に危害が加わる場合、或いは自分の利害が関係してくる場合はそれらを判断材料とします。それよりも、私は戦争やテロの場合のことを考えたいんですよ」

「戦争やテロでも考え方は同じだと思うよ。君は先制攻撃の正しさを問うけど、戦争の場合、誰がその正しさを判断するんだろうね？」

「それはもちろん国際世論ですよ」

「ホントにそれでいいの？攻撃された国はきっと自国の正しさを主張するよ？」

「でも攻撃されるようなこうをしないと、先制攻撃なんてされませんよ」

「それがどんなことにせよその国は先制攻撃されている以上、一方的に攻撃されているわけだから、被害国なわけだ。その国が正しくなかったと言い切ってもいい？」

「でも先制攻撃していなかったら、もっと大変なことになっていたかもしれないじゃないですか」

「なんだか話が平行線になってきたね。では視点を変えてみよう。仮に先制攻撃された国が、国際世論的に正しくないことを以前にしていたとしよう。だから専制攻撃されていい理由になるの？」

「う～ん・・・」

「もう一点。先制攻撃の正しさは国際世論が判断する、と言っていたけど、例えば、この世界に二つの国しかなかったとしよう。先制攻撃の正しさは誰がどう判断する？」

「ああ、そっか。フィフティーになってしまう・・・」

「さらにもう一点、危害や利害が判断材料になると言っていたけど、自分に危害を加えるものは正しくない？自分の利益にならないものは正しくない？」

「あああ・・・そっか。そんな世界はきっと正しくないのかもしれない」

「まあ、君の言っていることもわからなくはないよ。この世界はだいたいそんな感じだからね」



## みんなが幸せになるにはどうしたらよいか

---

「世界中の人間が幸せになるにはどうしたらいいんでしょう？」

「難しい問題だね。幸せってなんだろう？」

「幸せは・・・豊かさだと思います。ものの豊かさ、心の豊かさ。そして自由、平等、平和」

「なるほど。でも今挙げたものはすべて漠然としているね。要するにどうなることが幸せ？」

「それは・・・人それぞれです。一概にはいえないと思います。人によって何が幸せかなんて違うと思いますから」

「もったもだ。では何故、みんな一概に『幸せ』を求めるんだろう。そこだけはきれいに一致していると思うんだけど？」

「漠然としているものほど見解が一致しやすいのではないのでしょうか」

「なるほど。ではその漠然とした『幸せ』を世界中の人が感じるためにはどうすべきか、ということだね。ますます難しい問題になってきたよ」

「ああ、少し何が言いたいのがわかってきましたよ。今私達がこうやって考えることですね」

「察しが良いね」

「今日は冴えています。そう、理総論かもしれませんが、世界中の人が『みんなが幸せになるにはどうしたらよいか』を考えると、世界はいい方向に動くと思います。きっと」

「だといいね」

## 馬鹿は風邪ひかないのか

---

「諺で、馬鹿はかぜひかない、ってありますよね。ホントですか？」

「君、風邪はひきやすい方？」

「たまに風邪ひきますよ」

「ふーん」

「えっ？何ですかそれ？」

「馬鹿は風邪ひかないわけないんじゃない？」

「じゃあ、風邪をひいている？」

「けど？」

「けど・・・もしかして・・・風邪をひいていることに気付いてないだけ!？」

## 死刑は廃止すべきか

---

「日本には死刑制度があります。廃止すべきだと思いますか？」

「君はどう思う？」

「直感的に答えると、死刑制度を廃止すると犯罪が、特に重い犯罪が増えそうな気がします。それと、それに被害者遺族の気持ちが晴れないと思います。でも、死刑と言う形で、人が人を死に至らしめるような捌きを下すことにも違和感があります。どちらかという、廃止すべきではないように思います」

「確かに死刑制度は抑止力にはなっているかもね。犯罪者が死刑になったところで被害者遺族の気持ちが晴れるかは疑問だけど。そして、人間が罪を犯した人間に対して死んで償え、っていうことには私も違和感はある」

「では廃止すべきだと思いますか？」

「いや、私はどちらかと言うと推進派だね」

「推進派ってなんだか物騒な・・・」

「極論だけど、故意に人を殺めた人間は基本的に死刑でいいんじゃないかな。それも自分が殺めた同じ方法で死刑にしたらいいと思う。抑止力になるんじゃないかなあ」

「なんかすごいこと言ってますね。でも、さっき人間が人間に死を持って償わせるのには違和感があるって言ってたじゃないですか」

「違和感はある。でも死刑という抑止力も必要。殺してやる！って思うなら、殺される、という覚悟くらい持たないとね」

## 客観性は正しいか

---

「客観的に物事を見るにはどうしたらいいのでしょうか？」

「客観的ってどういう状態？」

「主観的の反対です。物事を冷静に見て、正しい判断をするためには必要だと思います」

「客観性はホントに正しいのかな」

「というと？」

「客観性って結局のところ、自己の意見を排除した視点のことだよ。ということは自分以外の人間から見た視点のことだ。必然的に多数の人間の視点と言うことになる」

「そうです」

「じゃあその自分以外の多数の人間が正しくない場合は客観性の正しさは？ましてやその多数の人間の正しさをどうやって評価する？」

「大多数が正しいというならそれがその集団の中では正しいということなのではないでしょうか？」

「ほんとにそれでいい？」

「いや、待ってください。例えば、偏った思考、偏ったモラル、偏った傾向にある集団の間で合意された客観論ほど恐ろしいものはないですよ・・・」

「そうだね。集団の体質をも変え、ものすごく大きな失敗に繋がる可能性がある。ニュースを見ればそういった組織の例がいくつかに目につく」

「要するに、客観論ほど不確かなものはないということですね。客観論を構築しているのは人間であり、その客観論を評価しているのも人間だから」

「そう、いくら客観性を叫んだところで人間は主観でしかものを見ることはできない。それは人間である以上、どうしようもないことだ。客観論が大多数の間でコンセンサスを取れたところで、所詮は不確かな人間達による合意でしかない。客観性とは主観を均質化したものに過ぎない、ということを忘れてはならない。その上で客観性を論じるべきなんだろうね」

## 平和に犠牲は止むを得ないのか

---

「平和になるためには、犠牲は仕方がないことなのではないでしょうか？」

「それって平和なの？」

「理想を言えば犠牲が必要な平和なんて、平和失格だと思います。でも、現実として理想的な平和を築くために犠牲は仕方がないと割り切っています」

「ねえ、それってホントに平和なの？」

「だってしかたがないじゃないですか。戦争をなくすには戦争を仕掛けてくる国をやっつけないといけないし、テロを仕掛けてくる集団には制裁を加えないといけないし、平和を望む人にとって、平和を望まない人は困るんです」

「それで仮に平和を成し遂げられたとしよう。それってホントに君たちが理想とする平和なのかな？」

「はい……。平和っていったい何でしょうね」

「犠牲が伴う平和って矛盾してるよね。ずいぶん勝手な偏った視点の平和だ。さらに悪いことに、現状は犠牲は伴うけど平和は訪れない、という状況になっていると思う」

「或いは、犠牲を伴うこと前提の平和だからこそ、平和の伴わない犠牲になっているのかも、とか思いました」

「そういうことなんだろうね」

## 選択できることは自由か

---

「選択肢の幅が広いっていいですよね」

「どういいの？」

「なんだか自由じゃないですか」

「それって自由なの？選択肢が多いからって選択を迫られていることには変わらないんじゃない？」

「それはそうですけど、選択する余地がないよりは自由じゃないですか」

「五十歩百歩だね。選択するとき自由を感じたいなら、選択肢の中に『それらを選ばないこと』という選択肢も入れておくといいよ」

「こういう人に選ばせると面倒くさいですね（笑）」

## 言葉とは何か

---

「私達にとって、言葉ってどういうものでしょう？」

「世界だ」

「世界、ですか。なんだかスケールが大きいですね」

「スケールが大きいか小さいかはその人それぞれだよ。少なくとも私にとっては、言葉は私の世界を構築しているものなんだよ。一つ一つの物事を言葉で定義することで、世界と繋がっていると見える」

「なんだかとっても小難しそうです」

「確かに言葉は難しいね。こうやって難しい言葉を使って、君との会話をPubooで出版するのも、自分のためだからね」

「自分のため？本を出版するためではなく？自分の文章力を認められたい、あわよくばお小遣い稼ぎができたらいいな、さらには将来、副業としてちゃんとした本を出版する機会になればいいな、とか思っていたんですか？」

「まさか。自分の文章の稚拙さは自分が一番良くわかっているよ。文法もめっちゃめっちゃだし、おかしい日本語使っているし、そもそも文章どうこう言うような内容でもないでしょう」

「じゃあ、自分のためというのは？」

「自分が疑問に思うけど、考えが簡単にまとまらないことを問答形式で君と会話することで、自分の世界を再構築しているんだよ。出版という機会を使って、少しだけ自分に強制力を持たせて文章を書いている」

「なるほど。何らかの機会がないと本なんて書けませんからね。ましてや自分だけのためだったらなおさらです」

「だから君には今のまま直感的で単純でシンプルでストレートなままの疑問や意見を言ってもらいたいな」

「なんだか悪い気はしませんがいい気もしない言い方しますね・・・」

# 続く

## ISSUES II

<http://p.booklog.jp/book/38406>

著者：了

著者プロフィール：<http://p.booklog.jp/users/bolog/profile>

感想はこちらのコメントへ

<http://p.booklog.jp/book/38406>

ブックログのpapier本棚へ入れる

<http://booklog.jp/puboo/book/38406>

電子書籍プラットフォーム：ブックログのpapier (<http://p.booklog.jp/>)

運営会社：株式会社paperboy&co.